

リ
セ
ツ
ト
6

◀ モルガナ

不思議な力で人を癒す少女。
移民の町では「盲目の聖女」と
呼ばれ、崇められているが……

▼ シリウス

▲ 水姫

▲ レグルス

▲ 風姫

▲ ユアン

ルーナの次兄。卒業後、
魔法師団に入団した。

▲ ジーン

ルーナの長兄。
リュシオンの腹心。

◀ リュシオン(21歳)

クレセニアの王太子。
強大な魔力を持つ
魔法使い。

フレイル(18歳) ▲

レングランド学院卒業後、
魔法師団に入団した
精霊使いの少年。
他人にはその力を秘密に
している。

▲ ルーナ(13歳)

ちひさ^{ちひさ}が転生した姿。
リヒトルーチェ公爵令嬢。
前世の記憶と強大な魔力を
持ちつつ人生やり直し中。

▲ カイン(20歳)

ルーナに助けられ、
公爵家に身を寄せていた、
エアデル国の第二王子。
現在はクレセニアに留学中。

▲ 千幸(享年18歳)

超不幸体質の女子高生。

第一章 ふたたびの花姫

あなたには、苦しくても目を逸らさない勇気がありますか？

十一月某日。

その日、王都ライデルは、五年ぶりの豊穣祭ほうじょうまつりに沸き立っていた。

豊穣祭自体は毎年行われるものの、五年に一度の大祭は特別だ。

故事にのっとり花姫と呼ばれる五人の娘が選ばれ、王都の大神殿にて奉納舞を披露するのだ。

大神殿での奉納舞は、王族や上位貴族しか観覧できない。しかしその後、大神殿前の広場で再度花姫たちの舞が披露される。

すでに神殿での奉納舞を終えた五人の少女たち——花姫は、広場に設置された舞台に勢ぞろいし、その美しさと衣装の華やかさで民衆の目を釘付けにしていた。

今回花姫に選ばれたのは、十三歳から十五歳の少女たち。

波打つ濃茶の髪をひとすじだけ垂らして結い上げ、青紫の藤の花で飾るのは、最年長のシュレイ伯爵家の令嬢マリア。

真つ直ぐな小麦色の髪を頭の左右で結い上げ、アマリリスで作られた花冠を身に着けているのは、十四歳になるロクシー二侯爵家の双子姉妹、エリスとアリスだ。

それぞれ白と赤の花を選ぶことで、同じ顔ながら受ける印象が大きく変わっている。

四人目は、クライン伯爵家令嬢コーデリアだ。肩までの藍色の髪には、凛とした彼女の雰囲気似合う紅色のダリアが飾られている。

そして最後のひとりは、現在十三歳——来月には十四歳になる、リヒトルーチエ公爵家の末娘ルーナだった。

濃さを変えた赤い薔薇の花冠が、銀色の長い髪によく映えている。

皆、それぞれ違つたタイプの美しい少女たち。そんな少女たちが、各々自分に合つた花をイメージした衣裳に身を包み、神々への奉納舞を踊るのだ。一目それを見ようと、民衆が会場を埋め尽くすのも無理はない。

特に、ルーナは五年前に最年少で花姫を務め上げており、史上初となる二度目の花姫として注目されていた。

五年前の彼女を覚えている者は、その成長ぶりに深い感慨を覚えていた。

ルーナが前回花姫を務めたのは、八歳。

他の花姫たちに比べてひと際小柄な少女だったが、愛らしい仕草と他の花姫にも引けを取らない美しさで、人々の視線を一身に集めていた。

そして五年の歳月を重ねた今、幼い少女は期待通り——いや、それ以上に美しくなっていた。

身長も伸び、体つきも女の子らしく成長している。花の蕾というよりは、もはや綻ぶ寸前といった様子だろうか。清らかでありながら色香さえ感じられるほどだ。

人々の歓声に笑顔で応えながら、花姫たちは舞台の上を優雅に移動し、円を描くように立ち止まった。途端、割れんばかりの歓声がピタリと止む。

広場の観客たちが息を呑む中、少女たちは右手を高く突き上げる。

シャンツ、シャンツ、シャンツ。

腕に巻かれた鈴のついたバンダが、その動きに合わせて涼やかな音をかき鳴らす。

続いて少女たちが右足を前に出すと、同じく鈴のついたアンクレットからシャンツという音が奏でられ、辺りに響いた。

花姫たちがクルリとターンすれば、その都度花冠を戴いた美しい髪が、古めかしくも優美な衣裳が、風になびく。

だんだん激しくなる動きに合わせ、鈴の音も大きくなっていく。その様子に、人々は息をするのも忘れたように一心に視線を向けた。

やがて奉納舞は終盤に差し掛かり、少女たちが軽やかに跳躍することで終わりを迎えた。

会場は一瞬の静寂の後、大きな歓声に包まれる。

熱狂する観客を前に、ホッと安堵した花姫たちは、その顔に自然と笑みを浮かべた。

「——はあ、やっと終わったあ」

淑やかな見た目を裏切るような軽い口調で、花姫のひとり——エリスがつぶやいた。すると、彼

女の隣にいたうり二つの少女——双子の姉であるアリスも同感だとばかりに、コクコクとうなずいた。

「神殿での舞は、陛下の御前ということで緊張しましたが、こちらはこちらであれほど多くの人の前で舞わなければならないのですもの。また緊張してしまって、わたくし、手足が震えそうになりましたわ」

おっとりした雰囲気似合う、丁寧な口調の少女——マリアは、胸の前で軽く手を握り合わせて双子姉妹に微笑んだ。

「なにはともあれ、上手くいったみたいでよかった」

緊張から解放されたせいか、大きく息を吐いて言ったのは、中性的な容姿と相まって凛々しい雰囲気を持つ少女——コーデリア。

そんな彼女の腕を、隣に立つ五人目の花姫——ルーナがぼんぼんと叩いて口を開いた。

「あとは祭礼行列だけだね」

「そういえばルーナ様。前回の花姫の時は、確か雨のせいで中止になってしまわれたのですわよね」

「う、うん。そうなんだよね」

マリアに尋ねられ、ルーナは歯切れ悪く答える。

それというのも五年前のことに触れられたからだ。

五年前、雨が降って祭礼行列が中止になったのは間違いではないが、実はその裏に、ルーナが誘

拐されたからという理由もあったのだ。

（そっか、思い返せばあの時、しいちゃんとかぐちゃんの二人に出会ったんだよね……）

もうすっかり一緒にいるのが当たり前になった、狼の神獣シリウスと獅子の神獣レグルス。彼らとの出会いは、ルーナが誘拐された森の小屋から逃げ出した先のことだった。

（誘拐されたのなんて楽しい思い出じゃないけど、それがなければしいちゃんたちとは出会えなかったわけだね。あの時は、皆が助けに来てくれて無事だったし、そう考えると、あれは必要な出来事だったのかな）

ルーナは当時のことを思い出し、そんなことを内心でつぶやく。

（それに、あれからも色々なことがあったし……というか、ありすぎだね）

自分で自分に突っ込みを入れ、彼女はクスリと笑った。

もうすぐ十四歳という短い生の中で起こった大きな出来事は、誘拐だけではない。無実の罪に陥れられたカインのために他国へ冒険に出たり、何度も魔物と対峙したりした。

クレセニアの最高学府、レンダランド学院に十歳で入学してからも、何事もなかったとはとても言えない状況だった。

つまり彼女は、普通の貴族令嬢では絶対にありえない危機を、何度も経験しているのだ。

それでも心身共に健やかでいられるのは、ルーナが『前世の記憶』というものを持って生まれたからだろう。しかも、このサントロイメとは違う、地球と呼ばれる別世界で暮らしていた、高崎千幸という少女だった時の記憶だ。

様々な小説やゲーム、テレビに映画といった娯楽ものの影響により、経験しているわけではないのに溜まる知識。そして十八年という、千幸であったころの体験が加わり、今のルーナに精神的なタフさと、柔軟さを付与していた。

そうでなければ、転生してからの怒涛の出来事は、彼女のトラウマとなりかねなかっただろう。ルーナがぼんやりとそんなことを考えていると、ふいに誰かの手が腕に触れた。

「どうした？ ぼーっとして」

「あ、ごめんね」

心配そうに小首を傾げるコーデリアに、ルーナは笑みを浮かべて首を横に振った。

コーデリアもルーナと同じレングランド学院に通っており、入学時から三年間、同じクラスに在籍している友達だ。

「ルーナでも緊張するのか？」

少しばかり悪戯つぼく訊かれ、ルーナはわざと頬を膨らませた。

「わたしでもって、どういう意味よ」

「ははっ。緊張とか、しなさそうだから」

「コーデリアったらひどいよ。わたしって結構繊細なんだからね？」

「そうかあ？」

なおもからかうコーデリアに、ルーナは反論しながらも頬が緩むのを抑えきれない。

（コーデリアとも、すっかり仲良くなれたよね。出会ったばかりの頃が信じられないくらいだよ）

最初はあらぬ誤解や行き違いから、ルーナはコーデリアから一方的に嫌われていた。

しかし、レングランド学院に入学し、数か月後の校外学習の時だ。魔物に襲われた事件をきっかけに誤解も解け、二人は仲良くなれたのだった。

今では、親友といっても過言ではない関係だと、ルーナは自負している。

もちろん、クラスメイトたちとは皆、良好な関係を築いているが、同年代となれば圧倒的に男子が多い。そのためルーナにとっては、『同じ年の女の友人』は、やはり特別な存在なのだ。

その中性的な容姿や、ややぶつきらぼうな話し方のせいで、ボーイッシュな印象のあるコーデリア。しかしその実、愛らしい動物や可愛らしい雑貨が好きという、女の子らしい一面を持っている。そんな彼女の新しい一面を知るたび、ルーナはコーデリアのことが大好きになっていった。だからこそ、今のような彼女との軽いやり取りが嬉しくて仕方ないのだ。

ニコニコと笑うルーナに、コーデリアは舞台のそでから指示をする神官を目で示す。

「そろそろ、引っ込んでもいいみたいだ」

「そうだね。もうここにいないでもいいなら、控室に戻ろう」

ルーナはうなずくと、他の花姫たちと一緒に神官に促されるまま歩き出した。

舞台から去ろうとする花姫たちに、観客から贈られる惜しみない歓声と拍手は、いつまでも鳴り止むことはなかった。

大神殿に用意された控室に戻り、ルーナは花姫たちとお茶の時間を楽しんでた。花姫としての仕事も、あとは祭礼行列だけだ。

行列は神官長を先頭に、花姫や神官たちが色鮮やかな花卉を撒きながら、西区を練り歩くというもの。

これは夕刻から夜半に行われるため、彼女たちはそれまでの時間、ゆったりと過ごすことができるのだ。

五人の花姫のうち、レングランド学院に通うのはルーナとコーデリアのみ。他の三人はお嬢様学校として名高いロメリア女学院に通っている。

通っている学校は違うものの、同年代の少女たちであれば共通の話題は尽きない。奉納舞の練習を重ねるうちに、すっかり打ち解けていた。

「——レングランド学院では、四年生から選択授業ばかりなのですわよね？」

思い出したようにマリアが話題を振ると、すぐさまアリスがそれに乗った。

「わあ、それってどういうものがあるの？ 楽しそう！」

「ロメリアだと、高学年になればなるほど、社交や貴婦人としての立ち居振る舞いについての授業が増えるんだもの。アリス、わたしたちもレングランドにすればよかったわね」

エリスが唇を尖らせて言うと、アリスはうなずいた後、憂鬱そうに言った。

「でもわたしたちの学力じゃ、レングランド学院に入学するのは無理なんじゃない？」

「それを言ってしまうてはおしまいよ」

天を仰ぐアリスと、それを見て肩を竦めるエリス。双子のやり取りに、ルーナたちは明るい笑い声をあげる。

「それで、選択授業ってどういうものがあるの？」

ひとしきり笑い合った後、アリスが改めてルーナとコーデリアに尋ねた。

「白魔法や黒魔法の講座、それに魔道工学とか、魔法大国と言われるクレセニア王国のもの、魔法関係のものは多いかな。でも、医学や薬草学といった講座も充実してるよ。とにかくいろいろな分野の講座が選べるの」

ルーナが言うと、すぐにコーデリアが口を挟んだ。

「魔法に関してルーナはすごいぞ。白、黒の上級課程をもう終わらせている」

「え、すごい！」

「レングランドの上級魔法課程が修了できれば、魔法師団からスカウトされるって聞いたよ」

「まあ、ルーナ様は本当に優秀でいらっしやるのね」

コーデリアの暴露に、アリスとエリス、マリアは次々に驚きの言葉を口にする。

厳密に言うと、三年生になった時点でルーナは黒魔法、白魔法双方の上級課程を終わらせていた。天才と呼ばれる彼女の兄ユアンにしても、三年生の時点では黒魔法の講座しか修了していなかった

のだから、そのすごさがわかるというものだ。

とはいえ、自分の話をそのようにされれば気恥ずかしいもの。ルーナは赤くなって言った。

「確かにわたし、魔法に関しては頑張ったけど、苦手な教科も多いんだからね。それに、コーデリアの方が学年一の才女と言われててすごいんだよ！」

ルーナの反撃に、今度はコーデリアが顔を赤くする。

「そんなの努力すれば、誰でもできるものだ。だけど、魔法は違う。ルーナの魔法の才能の方がずっとすごい」

「何言ってるの、コーデリア！ その人一倍努力してる姿がすごいんじゃない！」

「いや、そもそもルーナだって、魔法以外にも十分立派な成績じゃないか」

「ううん、コーデリアに比べたらぜんぜんだよ。それにいつもコーデリアに教えてもらってるからだよ」

お互いを褒め合うルーナとコーデリアを、他の三人の花姫たちは微笑ましく見ていた。二人のやりとりから互いを思い合う気持ちが窺うかがえて、胸があたたかくなる。

「ふふっ。二人とも優秀ってことでいいじゃない」

アリスが笑いながら言うと、エリスも大きくうなづく。

「そうよね。わたしとアリスは、魔法も勉強も至って普通なもの。ま、わたしたちの場合は優秀なお兄様たちがいて、両親にはその点を期待されていないから気楽でいいけど」

「でも、たまにはもう少し期待してって思うけどね」

おどけるようにアリスが言うと、マリアが「ああっ」と上品に手を叩く。

「そういえば、アリス様たちの兄上たちも双子でいらっしやいましたわよね」

「え、そうなの？」

「他の兄弟も双子なんて珍しい」

ルーナとコーデリアは、マリアの言葉に目を見開いた。そんな彼女たちに、双子の姉妹は悪戯いたずらっぽく笑ってみせる。

「本当よ。わたしたちと同じく、二人ともそっくり！」

「そうそう。でもね、おもしろいのよ」

「どういうこと、エリス？」

双子の話に興味深く聞き入っていたルーナは、笑い合う二人に尋ねた。

「わたしとアリスは顔も性格も似てるでしょう？ でもね、お兄様たち、顔はそっくりなのだけど、性格は正反対なの」

「ひとりは学問好きで、もうひとりは武芸好きだし」

「でも、ふたりともとっても優しいから、わたしたちは大好き」

アリスがそう締めくくると、同じく兄姉大好きなルーナは勢い込んで同意した。

「うんうん。わたしも兄様たち、大好きだよ」

ルーナの言葉で、彼女の二人の兄を思い浮かべたのか、その場にいた少女たちはうっとり目を細める。

「ジーン様とユアン様。どちらも素敵ですものね」
マリアがうつすらと頬を紅潮させて言えば、エリスとアリスが身を乗り出すようにして割って入った。

「そういえば、ユアン様って、魔法師団入りされるそうね」

「ええ！ さすが天才と称される方よね。ジーン様もリュシオン殿下の側近として手腕を発揮なさってるし」

（やっば、兄様たちって人気あるんだあ）

現在、長男であるジーンは次期公爵として領地運営を学ぶ傍ら、王太子であるリュシオンの側近として政にもかかわっている。

一方、十八歳になったユアンは、レングランド学院の卒業を来月に控えていた。

すでに魔法師団入りすることが決まっているのだが、どうやら彼女たちは、すでにその話を知っていたらしい。

二人とも抜群の容姿と家柄、そして能力とを兼ね揃えているため、少女たちが憧れの眼差しで語るのも無理はないだろう。

皆の可愛らしい反応を前に、ルーナはそんなことを思っつてこっそりにやつく。

そんな時だった。

控室がノックされ、全員が一斉にドアへと注目する。

「失礼いたします」

世話係の女性神官が入ってくると、ルーナは知らず小さく息を吐いた。五年前、誘拐された時と似たような状況に、無意識に緊張していたらしい。

「もう時間ですか？」

聞いていた時間より早いため、マリアが不思議そうに尋ねる。それに神官は、微笑みながら首を横に振った。

「いいえ、違いますわ。ルーナ様にお客様ですの」

「わたしに？」

ルーナは首を傾げつつ、椅子から立ち上がる。すると、ドアから二人の少年が顔を出した。

「ユアン兄様！ フレイも！」

声をあげ、ルーナは二人へと駆け寄る。

全身で喜びを表現する妹を、ユアンが優しく抱きとめた。

「ルーナ、今日の舞はとってもよかった。兄として、僕も鼻が高かったよ」

「ありがとう、兄様」

ニコニコと満面の笑みを浮かべるユアンに、ルーナは照れくさそうに礼を言う。

だがやはり、面と向かって褒められるのは恥ずかしいのだろう。ルーナは話題を変えようと、慌てて兄に訊いた。

「ねえ、何かあった？」

家族の面会が認められないわけではないが、祭事が終わるまで基本的に家族は花姫のもとに顔を

出さない。それは花姫が、期間中は神官の末席に数えられるからだ。神に仕える者に身分は必要ないとの考えから、家族との繋がりも一時的にないものと見なされる。

その前提があるにもかかわらず今回ユアンが訪ねて来たというのは、よほどの理由があったということになる。

ルーナが心配そうに顔を曇らせると、ユアンは安心させるように首を横に振った。

「ああ、本当にたいした内容じゃあないんだけど、少し話したいことがあってね」

「話したいこと？」

「そうなんだ。悪いけどちょっとついてきてくれないかな」

ユアンの言葉に、ルーナはきよんととして首を傾げる。すると、ユアンの後ろで黙って立っていたフレイルが口を挟んだ。

「ルーナ、ここじゃ話しづらい」

「あ、うん」

ルーナはチラリと後ろを見ると、フレイルに向き直つてうなづく。

彼女の視線の先では、他の花姫たちが控えめに、けれど興味津々でこちらを窺っていたのだ。

（これは確かに話しづらいかもしれないね）

ルーナは納得すると、部屋の時計に目をやった。

（うん、まだ祭礼行列が始まる予定時刻までにはかなり時間があるし、平気だよね。あ、でもその前に、兄様たちを皆に紹介しておく方がいいかな。さっきも兄様のことをアイドルみたいに話して

たし）

そんなことを思いながら、ルーナはこちらを窺う花姫たちに「おいでおいで」と手招く。

四人は一瞬ぎよつとしたものの、おずおずとルーナに近づいてきた。

「一緒に花姫をした、アリスにエリス、マリアだよ。コーデリアのことは知ってるでしょ？ こっ

ちは兄のユアンと、その友人のフレイル」

「ユアン・リヒトルーチェです。今回はルーナが世話になったね」

ルーナの紹介を受け、ユアンはトレードマークの穏やかな笑みを浮かべると、優雅な仕草で挨拶する。

「フレイル・エクルースだ」

ユアンに続いて名乗ったものの、フレイルの方は愛想のかけらもない。

昔は中性的な顔立ちも相まって、二人とも女の子と揶揄されるような容姿だったが、最近では背丈も伸び、すっかり大人びた。

ユアンはジーンに比べると線の細い印象だが、それがまた繊細なイメージを抱かせるようで、一部の女性から熱狂的な支持を受けている。

フレイルのほうは、普段は無表情を貫いているせいか、ミステリアスだと遠巻きに見られていることが多い。

もっとも二人とも——特にフレイルの方に関しては、見た目を裏切つてなかなか奇烈な性格をしている。それを知っているルーナにしてみれば、あまりにかけはなれた印象を聞くと思わず顔を

引き攀らせてしまうのだ。

コーデリアを除く四人の少女たちが自己紹介をすませると、一番年上のマリアが代表して口を開く。

「ユアン様のお噂は、かねがね伺っておりますわ」

「噂？ どんなのかな」

ユアンが笑って聞き返すと、ルーナ以外の少女は一瞬にして顔を赤くした。

（うん、確かに兄様の笑顔はある意味凶器よねえ）

赤くなった少女たちを、内心ニマニマと見守りながらルーナは思う。そしてふと、コーデリアを見ると、あることに気づいた。

他の少女たちが憧れのアイドルを見るような表情をしているのに対して、彼女は、どこかせつなさを含んだ瞳でユアンを見ていることに。

（コーデリアってもしかして、兄様のこと……）

そう思って記憶をたどれば、誰に対しても凛とした態度の彼女が、ユアンにだけは遠慮がちになつていたことに思い当たる。

（うわあ、うわあ、そっか、コーデリアってば……!）

すぐさま「大丈夫、わたしが協力するよ!」などと言ってしまいたくなる衝動を抑え、ルーナはドキドキする胸元にそっと手を押し当てた。

（落ち着いてルーナ！ 本人が言ってこない限りは、知らないふりをしてあげるのよ！ ああでも、

兄様が家にいる時にコーデリアを呼ぶくらい良いよね？）

以前、姉のアマリーが恋する人と結ばれるためのお手伝いをしたことで、ルーナはすっかりキューピッド役が気に入ってしまったのだ。

暴走しすぎてはいけないと自分に言い聞かせながらも、新たな恋の手助けができそうな予感に内心でいやつくのだった。

そんな彼女の心情がばれたのだろうか。

ルーナの妄想を阻止するように、黙っていたフレイルが口を開いた。

「おい、そろそろ行かないと時間がなくなるぞ」

「あ、本当だね。じゃあ皆さん、少しだけルーナを借りるね」

ユアンはにっこり笑って告げると、ルーナの肩を抱いて一緒に部屋を出る。そして案内をしてきた女性神官に声をかけた。

「ここからは、僕がついてますから。祭礼行列の時間までにはちゃんと戻ります」

「かしこまりました。では、わたくしはここで」

女性神官はユアンに深々と頭を下げると、その場から去っていく。それを見送った後、ユアンはルーナを伴い、女性神官とは反対方向へ歩き始めた。

「兄様、話ってなんなの？」

廊下を歩きながら、ルーナは気になっていた疑問を改めて口にする。

「ああ、いや、ほんとなんかしたことじゃないんだよ」

「そうだな。ま、すぐにわかる。それより今は先を急ぐぞ。意外に時間をくってしまったからな」
結局、ルーナの疑問は解消されなかったが、すぐにわかるというフレイルの言葉でひとまず納得することにした。

心なしが早歩きになったフレイルのあとを、彼女は慌ててついて行く。

「そういえば、今日はフレイも見に来てくれたんだね」

ルーナは思い出したように、フレイルに話しかけた。

「ん？ ああ、ユアンがな……」

フレイルはそう言って、後ろを歩くユアンを睨みつける。

「兄様？ 兄様がどうしたの？」

ルーナは、顔色を悪くする兄に首を傾げて訊いた。

「いやあ、せっかくのルーナの晴れ舞台じゃないか。ルーナもフレイルに見せたと思って思うよね？」

力説するユアンは、「ねー」と言って、さらにルーナへ尋ねてくる。

(兄様、そういうのフレイが嫌いだって知ってるだろうに……)

ルーナは内心呆れながら、いまだユアンを睨みつけているフレイルに話しかけた。

「兄様が巻き込んだみたいで、ごめんね。でも無視しないで来てくれたんだね」

「ああ、ジョンさんがユアンに頼まれて、俺の分も席を確保してくれたって言うからな」

「なるほど」

ルーナは納得してうなづく。

リヒトルーチェ兄妹とはすっかり仲良くなったフレイルだが、その中でもジョンのことは尊敬しているらしく、彼の言葉はよく聞くのだ。

「そうなんだ。で、どうだった？ わたしの舞は」

悪戯いたづらっぽくルーナが訊くと、フレイルは真顔で答える。

「綺麗だった。よく練習したんだな」

本心からなのか、フレイルはいたって真面目に褒める。あまりに予想外の言葉をもらい、ルーナの顔は見る間に赤くなった。

一方、そんな彼女を、フレイルは不思議そうに見ている。

「……うわあ、天然って怖いな」

フレイルとルーナのやり取りを横目に、ユアンはポツリつぶやくのだった。

十

三人が辿り着いたのは、神殿の奥にある貴賓室きひんしつのひとつだった。

神殿がリヒトルーチェ公爵家のために用意したものなのだろうと、ルーナはなんの疑問も持たず、ユアンがドアを開けるのを見ていた。

しかし中に入った途端、彼女は、わざわざここに呼ばれた理由がわかった気がした。

神殿内らしく、部屋に華美な装飾や調度品はない。だが、壁に彫ほられたレリーフは美しく繊細で、

調度品も同じく機能的でありながら優美だ。まさに、身分ある人物を迎えるにふさわしい。

そんな室内にいたのは、両親であるリヒトルーチェ公爵夫妻ではなく、この国の王太子であるリュシオンと、隣国エアデルトの第二王子カインだった。

彼らの後ろには、リュシオンの補佐である、長兄ジーンの姿もある。

リュシオンは銀糸で刺繍ししゅうの施された、髪と同じ漆黒のジュストコールを、優雅に着こなしていた。その隣に立つカインは、リュシオンとは正反対の色味で、金茶の髪によく映える白いジュストコールに、金糸で刺繍が施されているものだ。

端正な容貌と相まって、まさに『王子』というにふさわしい二人。

一方、後ろに控えるジーンは、最新の流行である黒いスーツに身を包んでいる。飾り気のない服装は、華やかな二人の装いとは真逆だが、不思議と双方を引き立て合っていた。

(なるほど。リュウヤカインが花姫の控室に来るなんて出来ないし、反対にその名前で呼び出すなんてことも出来ないよね。だって、王子様たちがそんなことやったら大騒ぎだもん。それでユアン兄様かあ。あ、フレイは、きつと無理やり引つ張ってこられたんだね……)

フレイルに同情しながら、ルーナは呼び出しの理由に深く納得した。

現在、リュシオンはクレセニアの王太子として、国王の片腕かたうでを担っている。それは政だけではなく、軍事や外交など多岐にわたっていた。

下手をすれば国王よりも多忙な彼とは、最近では会うことも稀まれで、お互い生活の時間が合わないため、通信の魔道具マジックツールで話すことさえ出来ないでいた。

それは兄であるジーンも同じだった。そのため祭事の最中、しかも花姫と貴賓きびんという立場での邂逅かいこうですら、今のルーナには嬉しい。

またカインのほうも、現在はレングランドの研究所で学んでいるとはいえ、研究所と学院の建物が遠く離れているせいで、偶然会うこともない。

さらに、王子とは公表していないものの、他国の者と人目のある場所で親しくするのは少なからず問題がある。

幼い時——国を追われていたカインが公爵家で暮らしていた時、ルーナはそれこそ四六時中彼と共にいた。それゆえに、「もつと頻繁ひんぱんに会えると良いのに」と思ってしまうのは仕方がないことだろう。

「びっくりしたか？」

驚いた表情のルーナを見て、リュシオンは楽しみに言った。

「もちろん驚いたよ！ 踊ってる時にね、遠目でも二人の姿が見ただけで嬉しかったけど……ちゃんと顔を見て話すことが出来るのは、もつと嬉しいんだ」

なんのてらいもなく、ルーナは素直に喜びを口にする。そのせいで、言われたリュシオンとカインの方が赤面してしまう。

二人は照れくさそうに顔を見合わせた後、誤魔化ごまかすようにそれぞれ口を開いた。

「おまえが一番上手に踊っていたと思うぞ」

「そうですね。ルーナが一番目を惹いていました」



先ほどのフレイルに続き、ストリートに褒められ、今度はルーナが照れる番だ。

（ううっ、皆、なんでそんな恥ずかしいことが言えるんだろう……元日本人のわたしには無理ですやめてください！）

内心で悶えるルーナだったが、自分も似たようなことをしている自覚はない。

「ほ、ほら五年前とはいえ、二回目だし。さすがに細かいところは覚えてなかったけど、練習しているうちに思い出したんだよね。だから、他の人より上手く踊れたのかも！」

真っ赤になって言い訳するルーナは愛らしく、その場にいた全員が和まされる。

だが、皆の微笑ましそうな眼差しが、今の彼女には辛いところだ。

「あ、あのっ。せっかくだし、座って話そうよ！」

「そうだね」

ルーナの強引な提案に、ジーンはクスリと笑ってうなづく。続いて彼は、身分の高い人物たちに囲まれていささか肩身の狭そうなフレイルに声をかけた。

「ああ、フレイル。面倒な役をさせて悪かったね」

「いえ、気にしないでください。じゃあ、俺は——」

ジーンへの返答と同時に逃げ出そうとしたフレイルだが、この場にそれを許す人間はいない。

「フレイルもこっちに」

「僕の隣にどうぞ」

「ああ、それがいいな」

すかさず腕を取ってユアンが言えば、すでに席に着こうとしていたカインが続き、リュシオンが
良い考えだとばかりにうなづく。

さすがにその状況で去ることもできず、フレイルは小さくため息をついて席に着いた。
(なんで平民の俺が……)

そんな彼の心の声が聞こえてきそうだったが、それでもルーナは、他人をまったく寄せ付けな
かった頃のフレイルを思えば、今の状況がただ純粹に嬉しい。だからこそ、彼の気持ちはわかるもの
の、助け舟を出すことはせず微笑むだけにした。

全員が席に着くと、リュシオンが時計を見ながらつぶやく。

「祭礼行列^{パレード}まで、まだだいぶ時間があるな」

「ええ。リュシオンの不在時の公務については、父と陛下がなんとかしてくれるはずですから、ゆ
っくり出来ますね」

リュシオンの言葉に、にっこり笑って答えるジーン。

父である公爵をはじめ、国王にさえも「あと頼んだ」と言つてのける彼に、フレイルの顔が地
味に引き攣^{ひきつ}る。

「ああ、そういうえば、ユアンとフレイルは卒業後に魔法師団入りするらしいね」

カインが話題を振ると、ユアンは誇らしげに、フレイルは無表情にうなずいた。

魔法師団。

クレセニアでは、軍隊の中に魔法に突出した者が集まる部隊がある。それが魔法師団だ。

魔法王国とも呼ばれる国だけあり、ここでは魔法使いはエリートとされている。その中でも、国
を守るために存在する魔法師団はエリートの中のエリートと言えた。

レングランド学院で上級魔法講座を修了した者の進路として一番に挙げられるのも、魔法師団だ。
例に漏れず、ユアンとフレイルも卒業後の進路として選んでいた。

公爵家の子息であるユアンが軍人として働く——前世の千幸であれば首を傾げたことだろう。

日本の感覚で言えば、御曹司的立場の彼が、下っ端軍人から始めるというのは違和感があるか
らだ。

しかし、クレセニア王国においては、貴族として父親の跡を継げるのは長男のみ。

長男に何かあれば話は別だが、基本的に次男や三男は成人後、自分の力で生きて行かねばならな
い。ゆえに、次男以降の貴族は、軍人や神官として道を切り開く者が多い。それは、大貴族の子息
であるユアンでも同じだ。

もつとも彼の場合は、そうした事情以上に、自ら魔法師団入りを望んでいたこともあり、卒業す
るのを今から楽しみにしているくらいなのだ。

「来年は優秀な士官候補が入ると、師団でも噂になってたぞ」

リュシオンが言えば、ユアンは頬を紅潮させて礼を言った。

「ありがたいですね。しかし、まだ実際に入団したわけではありませんし。もちろん、正式に配属
されたなら、自分に出来る精一杯のことはするつもりですが」

「そうだな。褒めたたえるのは結果が出てからか」

感心するリュシオンの言葉を聞いて、ジーンが悪戯っぽく弟を見る。

「自分でハードルを上げてしまっていますけどね」

「う…：そんなつもりはないんですけど」

ユアンは兄にからかわれ、たじたじの様子でつぶやいた。

兄弟のやりとりでルーナがクスクス笑い出すと、次の瞬間、皆が一斉に嘖き出す。

楽しいな空気が漂う中、ルーナは改めてその場にいる全員を見回した。

「このメンバーで揃うのも久しぶりだよね」

「そうだな。最近は皆、忙しかったことだしな」

しみじみと言うルーナに、リュシオンが答える。

出会った頃は、皆、子供だったのだ。

高貴な家柄に生まれたため、なんのしがらみもなかったとは言わないが、その責任は成人した現在とはまったく違う。

（もし、ルーナに出会わなければ…）

ふとリュシオンは思う。

ジーンは今と同じく彼の傍にいただろう。だが、今のように心を許せる側近であったかどうかといえど、おそらく違った。

人には過ぎた魔力を保有し、それを幼さゆえに暴走させたことが、リュシオンを孤独に陥れた。

さらに実母の死から数年後、義母となった王妃キーラはリュシオンを疎んじる。父親である国王

はリュシオンの味方であったが、何分多忙で、常にリュシオンについていることは不可能だった。

そうした環境も手伝い、リュシオンは孤独の闇に吞まれていく。化け物と呼ばれる己を一番恐れていたのは、彼自身だったかもしれない。

だがそんな時、彼はルーナと出会った。

同等の魔力を持つ彼女とかわかることによつて、リュシオンの心の硬い殻が破れ、孤独が癒されることとなった。

もし、ルーナと出会った頃のままのリュシオンならば、王太子という重圧の中でさらに孤独を深め、その心の形を歪にしていたかもしれないのだ。

それはリュシオンだけではない。

カインやフレイルにしても、ルーナがいなければ、このような気安いい関係を誰かと築くことはなかっただろう。

（まるで太陽…いや、暗闇の中で光を差し示す月か…）

ふとそんなことを思い、リュシオンはらしくない詩的な表現に苦笑する。

「—それにしても、今日は、なんにもなくてよかったよね！」

物思いに耽るリュシオンを余所に、ルーナはそんなことを訴えた。

「そうですね…」

「ああ。まあ、そうそう何かあったまるか、だがな油断は禁物だ」

深くうなづくカインに続き、リュシオンは苦虫を噛み潰したような顔で嘯いた。

「それって、王妃陛下の態度の変化ですか……」

ユアンはぼつりと漏らした後、下手をすれば問題な発言だと気づいたのかハッと口元に手をやる。しかしリュシオンは、気にしていないと笑った。

「ああ、構わないぞ。ここには身内だけだしな」

「だが、外では発言に気をつける。ユアン」

リュシオンの言葉にホッと力を抜いたユアンだったが、続いてジーンに咎められ、慌てて表情を引き締める。

「でもユアンの言う通り、今日の——いや、ここ数年の王妃はどうかしたのかと思うほど大人しいですね」

カインが言うと、その言葉に大なり小なり心当たりがあるのか、皆が押し黙った。

リュシオンの義母にあたる王妃キーラは、彼を疎んじ、頻繁にその命を狙っていた。しかし、王子である彼を弑するのは難しく、計画はどれも失敗に終わっていた。

そこで次に、彼と親しいルーナを狙うことを考え、様々な企てを実行してきた。にもかかわらず、ここ二年ほどは、まったくと言って良いほど、その影を薄くしている。

ルーナは話を聞きながら、今日の王妃の様子について思い返した。

神殿での奉納舞には、王族も出席する。リュシオンの異母妹——身体の弱いネイディア王女は、今回も体調不良のため欠席だったが、国王と王妃、そして王太子であるリュシオンは祭事に臨んだ。基本的に祭事中は俗世と離れるためという理由から、国王夫妻であろうと接触することはない。

それでも、王妃から話しかけられれば、ルーナは彼女を無視することなどできないのだ。

だからこそ、王妃の動向にはルーナも気を配っていた。

けれど今回、王妃は神殿に着くなり、用意された貴賓室に閉じこもってしまう。ようやく現れた彼女は、いつになく機嫌が良いようで、笑みを浮かべて周囲に愛想を振る舞っていた。

続いて行われた祭事の席でも同じで、ルーナが花姫として祭事や舞を務めるのに対し、睨みつけるどころか微笑んでいる。

(いったい、どうしちゃったの？ いつもと違うと調子が狂うよ……)

ルーナがいささか不謹慎な感想を漏らすほど、王妃の態度や行動は異様だったのだ。

「あの時からだな……」

ふいにつぶやいたリュシオンへ、皆が注目する。

「アマリーの婚約式だ。あの後、絶対に非を認めることなどないと思っていたが、あれは自分から謝罪することであの場をうやむやにした。それが一番賢いやり方とはいえ、無駄に矜持が高いばかりの女がそれを実行するとは驚いたものだったが……」

二年近く前、アマリーの婚約式で魔物が放たれるという事件が起こった。

小型とはいえ魔物は魔物。下手をすれば死人が出てもおかしくない、悪質ないやがらせだ。

その首謀者が、王妃キーラだった。

幸いにも、ルーナやリュシオンたちの活躍により、怪我人は出ず、実行犯も捕らえられた。さらにそこから、王妃の企てであることが露見し、彼女を追い詰めた。——かに見えた。

しかし、王宮に逃げ帰った王妃は自室にしばらく引きこもった後、意外な行動に出る。自分から国王へと謝罪したのだ。

曰く、「公爵家に対しての小さな悪戯だった」とのこと。

公爵家に悪意を持つ人物に自分は騙されたのだと。その者の、「せいぜい醜悪な虫を放して脅かすだけ。そこで主役の二人は助け合い、絆を深くするという演出だ」との言葉を信じてしまった。決して、毒のある、ましてや魔物などを放すことなど知らなかったと。

もちろんリュシオンも国王もこのような言い訳を信じなかった。だが、王妃は珍しく彼女らしくらぬ周到さを見せる。

まず実行をそそのかしたという伯爵を自ら断罪し、自身は被害者であるという立場を貫いた。さらしおらしく謝罪することで、ルーナおよび自らの政敵を潰すという企ての首謀者でありながら、愚か者に騙された被害者という立場にすり替えたのだ。

死者が出ていないこともあり、結局この件を理由に王妃を完全に排除するのは難しくなったのだった。

上手く立ち回ったと言えばそれまでだが、リュシオンたちは腑に落ちないものを感じていた。

王妃という自身の身分を至上とし、他者を——たとえ国王であつても——見下してきた王妃だ。それが保身のためとはいえ、あつさりプライドを捨て謝罪するだろうか、と。

疑問は浮かぶものの、王妃という立場にしがみつくための苦肉の策だろうと、国王やリュシオンはそれ以上追及しなかった。そうして、件の事件は公になることなく、うやむやになってしまった

のだった。

「あの件については、王妃陛下の方が上手だった……ですがやはり、どうもそのやり方がらしくないと思えてなりません。それがずっと気になっているのです」

ジーンが訴えれば、続いてカインも意見を述べる。

「ああ。僕もそれが不自然だと思つた。しかも、あれから怪しい動きがないどころか、最近ではやることもまともに見える」

彼らが言う通り、王妃はあの一件以来、別人のように大人しくなった。

もちろんそれが反省したからとか、今は動かない方が良いからという理由なのかもしれないが、それでも以前の性格を知っていれば首を傾げることばかりだ。

皆がここ最近の王妃の動向を訝しむ中、リュシオンが口を開く。

「そういえば、散財もなりを潜めたな。それどころか、最近では王都や近辺の町に、私財で治療院を建設する計画を立てているらしい」

「えっ？ あの王妃が？」

意外な情報に、カインは思わず驚きの声をあげた。

ルーナも声には出さなかったものの、心の中では正直な感想を漏らす。

(あの王妃様が私財を投げうって治療院って、悪いけどぜんぜん似合わない……)

国王や王太子のリュシオンに比べ、王妃の人氣が今ひとつなのは、なにもその性格だけのせいではない。

庶民にとって、王族や貴族は次元の違う、遠い存在だ。実際の性格など知らずとも問題もない。だが、自分たちの生活を豊かにしてくれるかどうかは別だ。

善政を心掛けている国王やリュシオンが国民に人気なのは、当たり前のことだった。

それに対し、王族として国民の前に出るものの、庶民の生活にまったく心を配らない王妃は民の支持を得ていない。

だがそんな王妃が、ここ一二年、まるで生まれ変わったかのように、王都の貧しい地域などに治療院を作る活動を始めたり、積極的に各地の視察に乗り出したりしたのだ。

（「薄汚い庶民が！」なんて言っていた人が、いきなり慈善事業に目覚めたって言われてもね……）

王妃がかかわってしようとも、その事業が発展していくのは良い。しかし、それらの活動が以前の彼女とはあまりにもかけ離れているため、何か裏があるのではと勘ぐってしまうのだ。

「あっ」

その時、ふと思いついたようにユアンが声をあげた。

「どうしたの、ユアン兄様？」

「いや、王妃の慈善事業って聞いて、思い出したことがあったんだ」

「それはなんだ、ユアン」

ジーンが尋ねると、ユアンはフレイルをチラリと見てから話し始める。

「この間、フレイルと一緒に街に出た時なんだけど……用事を済ませた後、そのまま商業区の食堂で食事していたんだ。そしたらそこで、ある噂を聞いて……」

「噂？ どんなものだ？」

リュシオンの疑問に、ユアンはかしこまって答えた。

「盲目の聖女のことです」

（『盲目の聖女？』）

ユアンが放った言葉を反芻し、ルーナは首を傾げる。彼女だけではなく、カインやリュシオン、ジーンも、聞いたことのない単語に首をひねった。

そんな様子を眺めるばかりで、説明する気配のないユアンに、見かねたフレイルが遠慮がちに説明を代わる。

「なんでも最近、王都の近くにある貧民街に現れる女のことらしい」

「貧民街……？」

ルーナは思わず声をあげた。

『盲目の聖女』というなんとも大仰な名前の人物も気になるが、今は『貧民街』というキーワードが聞き捨てならない。身分制度がある以上、裕福な者と貧しい者が出来るのは仕方ない。それは、彼女が前世で暮らしていた日本でも、存在していた問題だ。

しかし、クレセニア王国では、貧しくとも命の危機に直面する者は少ない。そうなる前に、国からなんらかの保護が施されるからだ。

もちろん、働かずに散財したあげく貧しくなったというのであれば本人の問題だが、基本的に、飢えるほどの事態になる者は極稀だ。

そのため、下町はあつても、『貧民街』などと呼ばれるような地域は存在しないはずなのだ。

「貧民街ってどういうこと？」

ルーナの疑問に、リュシオンが眉間に皺を寄せて答えた。

「それについては、一応国でも把握している。つい数か月前のことだ。最初は政変によって南から流れてきた数人の移民だった。彼らは王都の近くに滞在するようになったんだが、その人数が数日単位で爆発的に増えた。着の身着のまま逃げてきた彼らは、持ち出してきた金も極わずか。当然、職がないため生活は困窮する。それで周辺の畑や農場を荒らすようになったんだ。最初は同情して面倒を見ていた周辺の村人たちも、その事実を知って背を向けた。移民たちの生活はさらに困窮し、周辺の住民も寄りつかなくなった。そういう過程があり、最近ではその界隈を貧民街、あるいは移民の町と呼ぶようになったわけだ」

「そんなことが……」

説明を聞き終わり、ルーナは呆然とつぶやく。

レングラント学院に通い、様々な国の政治や情勢などを学んでいるつもりだが、こんな身近な出来事すら知らなかったのだ。

「で、話を戻すが、貧民街に現れる女と言ったな？」

リュシオンがフレイルを見て尋ねると、彼はコクリとうなずいて再び口を開いた。

「なんでも両目を布で覆い隠した女らしいです。貧民街でさまざまな奇跡を起こし、その連中に『盲目の聖女』と慕われているという」

「奇跡、ねえ……」

フレイルの説明に、ジーンは皮肉げに言う。

まるで信じてはいない口ぶりの彼に、ユアンが声をかけた。

「でも兄様。王都でも結構噂になつてみたいんだよ。枯れ果てた井戸に再び水を湧かせたとか、酷い怪我を一瞬で治してしまつたとか。それが本当ならば、聖女つていうのも案外嘘じゃないのかもね」

「ユアン。おまえの素直で人を疑わない性格は長所だが、同時に短所でもある。自分の目で確かめたのでなければ、安易に噂を信じるなど愚の骨頂だ」

「う……そうですね。すみません」

兄に窘められ、ユアンはしゅんつと肩を落とす。

そんなユアンに、ルーナが助け舟を出した。

「まあまあ、ジーン兄様。ユアン兄様は噂話を説明してるだけなんだから。……でも、怪我を一瞬で治してしまうっていうのは、白魔法なのかな？ だとしたらすごい使い手だよね」

「ああ。だがそれとは別に、〈過去視〉や〈未来視〉といった、巫宜らしい力もあるという話だった」

フレイルが言うと、リュシオンは顎に手をやって考え込む。

「神殿の巫宜……いや、はぐれか。だが、彼らはその力の代償として魔法は使えなかったんじゃないか？」

「そのはずです。となると、噂のうちいくつかは嘘かもしれません。……はぐれだとすれば、なんとも怪しい聖女ですね」

ジーンは胡散臭いと言わんばかりに鼻を鳴らした。

神殿預かりとなつている巫宜とは違い、市井に多く存在する『はぐれ巫宜』と呼ばれる者たちは、大半が巫宜を自称するだけの怪しい者たちだ。

そのため、一般的にはぐれ巫宜は胡散臭い存在だと認識されている。

話を打ち切りそうなジーンに気づくと、ユアンは慌てて口を開いた。

「あ、あと、その『盲目の聖女』を手厚く保護している、やんごとない方がいるとのことです。先ほどの話を聞いてふと思ったのですが、そのやんごとない方っていうのは、もしかして……」

「王妃か……」

ユアンが言いよどむ部分を、リュシオンが口にし、さらに続ける。

「貧民街の者たちを救う聖女。それを手厚く保護することで、結果的に貧民街の者たちを救っている者か。もし謎の出資者が王妃だとすれば、自国の民ではない者たちを救っても人気取りにはならん。よほどその聖女とやらを信奉しているのか。だが、はぐれ巫宜を公に支援するのは外間が悪い。それで名前を隠しているのかもしれないな」

「ええ。自己顕示欲の塊のような人間が、人気取りにもならないことをするくらいです。本当の話なら『盲目の聖女』なる者への傾倒ぶりはよほどのものですね。まあ、あの王妃を更生させたというのなら、本当に聖女かもしれませんが」

皮肉を込めたカインの考察に、リュシオンは深くうなずく。

「もしくは、他に何か企んでいるのかもしれないが……」

ポツリと零すリュシオンに、全員が顔を強張らせた。そんな中、ルーナは強い眼差しを皆に向けて声をあげる。

「アマリー姉様が治療院を設立して、救われた人がいっぱいいたでしょう。だからね、王妃様が姉様の考えに賛同して同じようなことをしてくれるなら、とつてもいいことだと思ふの。でも、もしそういう思いを利用するだけならば、許せないよ」

「慈善事業というのは、人気取りには最適な話だからな……ひよつとすると、聖女の事とは別に移民の町を実験の場にでもするつもりか？ 上手くいったら大々的に名前を出すことにして」

ルーナの言葉に、リュシオンは苦々しく吐き捨てる。

それにジーンが続いた。

「しかし、どういう意図であろうと、やっつてやることはまともですからね。こちらとしては手が出せなくて歯がゆい」

「まあ、ないとは思ふが、心を入れ替えた……という可能性も無きにしても非ずだからな」

「そうだったらいいのに」

祈るようにつぶやくルーナに、皆は「それはないだろう」という心の中の声を押し殺す。

人の汚いところを随分見てきたはずだが、それでもまだ人の善良さを信じようとする清らかな彼女の心根を、誰も壊したいとは思わないのだ。

「どちらにせよ、王妃の動向にも、注意するに越したことはないだろう。本当に王妃が謎の出資者ならば、その『盲目の聖女』とやらと必ず接触するはずだ」

そう結論づけるリュシオンに、その場にいた一同はまた深くうなずいた。

「そうですね。まずはそれしかないでしょう。他には……ああ、ユアン、フレイル」

ジーンは弟とその友に目を向けると、にこりと笑って声をかけた。

「なんですか、兄様」

「なんです？」

不思議そうにする二人に、ジーンは笑顔のまま告げる。

「私たちも情報収集しているが、なかなか市井しせいの話は耳に入りにくい。これからもぜひひこまめに報告してほしい」

定期的な報告を、という言葉の裏の意味に、優秀すぎるユアンとフレイルはすぐさま気づいた。

（うわあ、拒否権ないよね、これ）

（……決定事項だな）

目と目で言葉を交わしつつ、二人は諦めたようにうなずく。

そんなやり取りを見たルーナとリュシオン、カインの三人は、不謹慎ながらこっそりと笑ったのだった。

第二章 アマリーの憂うれ

豊穰祭から四か月後。

王都ライデルもすっかり春めき、あちこちに花の彩いろどりが添えられている。

鏡の前でメイドに髪を整えてもらいながら、ルーナは無意識に小さく鼻歌を奏でた。

「ルーナ様ったら、ご機嫌ですわね」

クスリと笑いながらメイドが指摘すると、彼女はハツとして口元を両手で押さえた。

（ううっ、笑われちゃったよ……）

一瞬しよんぼりとしたものの、ルーナはすぐにまた笑顔になる。

そう。今日彼女は、とても浮かれていたのだ。

（ああ、楽しみだあ）

ルーナはそわそわと落ち着かない様子で、鏡に映る自分を見る。それがわかっているのか、メイドは小さく微笑んで、作業の手を速めた。

「はい、終わりましたよ」

しばらくして、メイドが告げる。

ルーナの真っ直ぐな銀髪は、サイドを編み込んだハーファップに整えられ、あちこちに小さな赤

い薔薇の花飾りがちりばめられていた。

彼女の今日の装いは、白いレースがアクセントになった赤いベルベットのドレス。三月とはいえまだ寒さの残る時期のため、外出には厚手の衣服が必須なのだ。

「これで準備完了ね！」

ルーナが嬉しそうに言った時、ノックの音が室内に響く。

すぐさま近くにいたメイドがドアを開いた。そこには、ルーナと同じように外出着に身を包んだジーンの姿があった。

「ジーン兄様！」

ルーナは椅子から勢いよく立ち上がって駆け寄り、室内に入ってきた兄に抱きついた。

「おやルーナ、もう準備は出来たかい？」

「うん。準備万端だよ！」

ルーナが元気に答えれば、ジーンは微笑んで彼女の頭を撫でる。

「用意が出来ているなら、さっそく出掛けようか」

「ええ！ 早く行きたい！」

はしゃいだ声をあげるルーナに、ジーンは片目を瞑り、気取った仕草で右腕を差し出した。

「お嬢様、お手をどうぞ」

「ええ、ありがとう」

兄の腕に自分の腕を絡め、ルーナは同じように気取った様子で答える。次の瞬間、二人は同時に

噴き出した。

「もう、遊んでないで早く行こうよ」

「そうだな」

笑いつつも咎めるルーナに、ジーンは絡められた彼女の腕を軽く叩いて応えた。

二人は廊下に出ると、楽しそうに話しながら歩き出す。

「ユアン兄様も一緒だったらいいのね」

「ああ。だが、ユアンは師団ではまだ新入り。この時期においてそれと休暇など取れないさ」

「そうだよねえ。っていうか、ジーン兄様が休暇を取れたっていうのも珍しいよね」

ルーナは横を歩く兄を覗き込むようにし、悪戯っぽく笑った。

王太子であるリュシオンの側近であり、補佐であるジーンは、主君と同じ、いやそれ以上に多忙だ。

決まった休日があっても、ジーンはリュシオンが働く限り休むことはない。そのためリュシオンは時折、ジーンに休暇を取らせるために、予定を入れない日を作るほどだった。

今日も予定を強制的に後回しにしたリュシオンから休暇を命じられ、ジーンは久方ぶりの休暇を実家で過ごしていた。

そんな彼が、ルーナに声をかけたのは昨日のことだった。

ちやうど休養日で学院の寮から家に帰ってきていたルーナへ、ジーンは二年前に嫁いだ姉、アマリーに会いに行かないかと誘ったのだ。